

しいのき

徳川齊昭の書

名誉館長

三 隅 治 雄

本年1月からNHKの大河ドラマ「徳川慶喜」が放映されています。いまは前半で、ここでは慶喜より、父親の九代水戸藩主齊昭の活躍がめだっています。何より徳川御三家の中でも、江戸に常住して將軍家を補佐する副將軍的役割を負いながら、しばしば水戸に帰って藩政改革に熱中し、水戸学を興し、尊王攘夷を唱えて武備を構えるなど、幕府を刺激する行動を取った異端の傑物です。「烈公」と諡されたのもっともな藩主でしたが、その烈公の書が、当館所蔵の山崎家遺品の中にあるのが意外です。

左の写真の軸がそれですが、山崎家の伝えでは、1868年の戊辰戦争の折り、上野の寛永寺に立籠もって東征軍に敗れた彰義隊の残党が、逃走の際、湯島の聖堂にあった齊昭の書を持ち出し、埼玉の所沢方面に向かう途中、山崎家に立ち寄り、介護を受けた礼に、これを置いていったものと申します。彰義隊にとっては尊王思想の齊昭など粗略に扱ってよい存在だったのでしょうが、書はじつにりっぱです。その文も「富貴に^い淫ず 貧賤を楽しむ 男兒此に到らば 是豪雄」という、いかにも、質素儉約を旨とし、藩校弘道館を建てて藩士に文武兩道を極めさせ、豪気雄渾の氣風を養わせた水戸烈公の情熱と氣概がほとぼしっているように感じられます。



徳川齊昭 書

(山崎家資料)

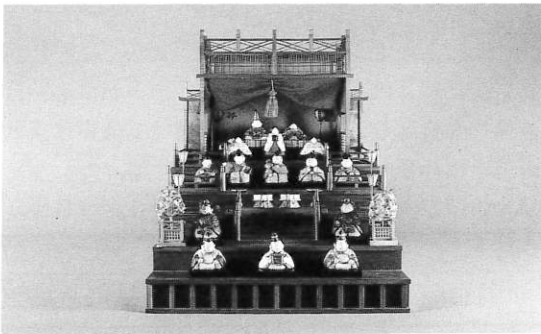
文化財よもやま話

おひなさま展のこと

資料館では開館してから毎年、雛祭りによせて「おひなさま展」を開催しています。雛壇を組み立て、雛人形を一体一体展示していくわけですが、不思議と他の資料とは異なり、人形を手にとると「また今年も、一年振りに会いましたね」という感慨がよぎります。雛人形を展示する作業は大変な時間を要するので、資料館あげでの準備となります。そのため「おひなさま展」が資料館のいわば年中行事となっていることもあります。改めて一年めぐりきたことを思います。

ところが、「おひなさま展」を年中行事として捉えているのは、どうも館職員だけでは無いようです。展示開催中、来館者の方々とお話をすることがあります。その会話の中でよく聞かれるのは「毎年来ています」という言葉です。ある日は小さな子ども連れのお母さんとお話をしましたが、住宅の関係でお雛さまを飾ることができないので、代わりに資料館の雛人形を毎年観に来ているのだそうです。展示を観ることが家の雛祭りだともおっしゃいました。その言葉を聞いてハッと胸を突かれました。歴史的に貴重な、雛人形という資料を展示する、そういう意識で展示に携わっていましたが、来館者の方にとっての「おひなさま展」は、まさに現代に息づいている雛祭りの一部であったのです。この企画展を観ることがある家庭での雛祭りとなっている、そう気付くことは、このような企画展の持つ意味、力をもう一度考えることの契機となりました。

さて、今年も新たな人形を加えて開催しました「おひなさま展」、来年もどうぞご期待下さい。



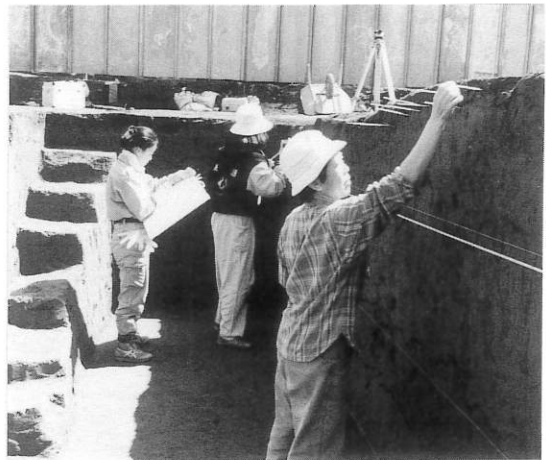
大地に眠る歴史

発掘調査はどうか（その2）

発掘調査はどうか、について2回目になります。前回まで、住居跡や土坑など、昔の人々が残した遺構の掘削状況を紹介しました。さて、これらの掘削が終わりますと、つぎに行うことは、写真撮影と実測図の作成になります。

このように、調査は、掘削—観察—写真撮影—実測図といった一連の作業の繰り返しによって進行していきます。

写真撮影は、遺構の場合はまわりを清掃して、脚立などを用いて高い位置から行います。遺物はその出土状況に応じて近づいて撮影します。通常写真は、プリントとスライドの二種類が必要となります。プリントは報告書作成用で、スライドは調査結果の発表に使います。



上の写真は、土層の実測図を作成している風景です。手順としましては、まず、土層面に水平に糸を張ります。そして、この糸から、横へ何センチ、上あるいは下に何センチといったように何点も計測していき、点と点をつないで図としていくわけです。点は鉛筆で方眼紙に実際の10分の1もしくは20分の1といったように縮小して描いていきます。写真の右の人物はこれから計測する点の位置に糸をさしています。中央の人物は、その点を巻き尺で計測しています。左の人物は画板に張った方眼紙にそれを描いています。このように、現地の発掘作業は進んでいきます。（つづく）

平成9年度中野区登録・指定文化財

平成9年度中野区登録指定文化財は、神社所蔵石造物を対象に、つぎの12件を指定しました。ここに紹介いたします。

鳥居（鷺宮八幡神社）

白鷺1-31-10

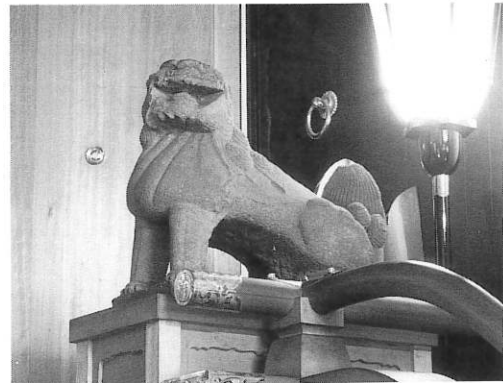
区内に現存する鳥居では最古のものです。石造の鳥居は倒壊しやすいため、都内でも18世紀に溯るものはあまり多くありません。その意味でも宝暦10年（1760）9月に建立され、文化10年（1813）9月に修理・再建されたこの鳥居は貴重なものです。

笠木・鳥木の反り方や柱の傾斜も適宜で、全体的なバランスが優れており、力強く美しい安山岩製の鳥居です。

柱には「願主 横山定兵衛・大野又左衛門」などの文字が刻まれています。



鳥居



狛犬（阿形）

こまいの 狛犬（東中野氷川神社）

東中野1-11-1

阿形・吽形一対の狛犬で、青緑色の凝灰岩で制作されています。前足に体重をかけて腹這うような形に特徴があります。頭をあげ、胸を張り、前足をそらしています。全体に体高が低いので、尾はあまり高くありません。

彫りははいねいで、体毛の表現も穏やかで筋目は浅いものです。屋内に保存されているため風雨による摩耗も少なく、保存状態は極めて良好です。全体の様式から江戸時代前半の制作によるものと考えられます。



狛犬（吽形）

とうろう
燈籠（沼袋氷川神社）

沼袋1-31-4

右側が享保5年（1720）1月、左側が享保18年（1733）1月に建立されたもので、区内最古の燈籠です。

宝珠・笠・火袋がやや小振りであるのに対して、中台は厚く、竿は太めで中ほどに節をもっています。全体として華美な装飾を避けた優美なつくりとなっています。様式的には江戸時代中期前半の奉納燈籠の特色を示しています。



燈籠

ちようずいし
手洗石（東中野氷川神社）

東中野1-11-1

安山岩をくりぬいて造られたもので、やや逆台形、荒削りの素朴古様の手洗鉢です。表面には、宝永5年（1708）3月の紀年銘などが刻まれています。区内の神社に現存する奉納石造物では最古のもので、中野における神前奉納の年代を知る上で貴重なものです。



手洗鉢

ちようずいし
手洗石（大和町八幡神社）

大和町2-30-3

宝暦11年（1761）11月に造られたものです。安山岩をくりぬいて造られたもので、逆台形、底部分はアーチ状に彫られています。四面は平滑に仕上げされ、周縁には縁取りが施されています。この形態は19世紀前半に盛行したもので、そのはじまりを考える上にも重要なものです。



手洗鉢

如意輪観音講塔 (打越天神北野神社)

中野5-8-1

講塔とは、信仰でつながった村落内での構成員である講の結成を祝って立てた石造物のことです。この講塔は如意輪観音を信仰する人々の講があったことを示しています。

元禄13年(1700)11月の建立で、講が出現しはじめた初期の頃に属するものです。



如意輪観音講塔

石橋供養塔 (東中野氷川神社)

東中野1-11-1

安永6年(1777)12月に、中野村下宿に住んでいた大戸権兵衛が願主となって氷川神社の氏子達によって石橋が造られたことを記しその安全を祈願した供養塔です。銘文は当時宝仙寺の住職であった法印祐巖の筆によるものです。本来、橋などの建造にあたっては必ず供養が行われるはずですが、その記録はほとんどといて残されていない、その点で歴史史料として価値の高いものです。



石橋供養塔

力石

- 東中野1-11-1 (5個) (東中野氷川神社)
沼袋1-31-4 (7個) (沼袋氷川神社)
白鷺1-31-10 (13個) (鷺宮八幡神社)
新井4-14-3 (12個) (新井北野神社)
江古田3-13-6 (3個) (江古田氷川神社)

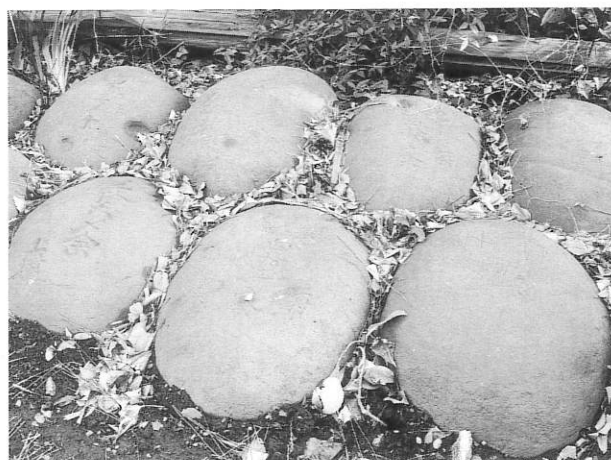
力石は、昔、若者たちが力くらべに用いたものです。力くらべは、通常、正月の神社祭礼の時行われた成人儀礼の一つで、これらの石を肩より上に持ち上げることによって、大人の村落構成員として認められたのでした。そして、持ち上げた石には重さや姓名を彫り込んで神社に奉納しました。

中野でも大正時代頃までは行われていた神事儀礼ですが、現在では中野はおろか、周辺地域でも見られなくなっています。

また、力石も周辺地域でまとまって残されている例はほとんどなく、今はなき民俗儀礼を偲ぶ唯一の資料として貴重なものです。



東中野氷川神社



鷺宮八幡神社



新井北野神社

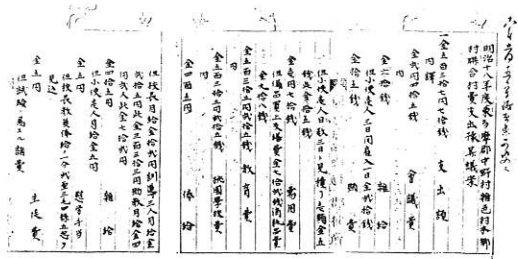
古文書つづり

あちらの十年 こちらの十年

今回は2つの十周年についてです。まずは中野で最初の公立小学校のものをご紹介します。

明治8（1875）年、教員4人生徒156人の公立小学校桃園学校が、宝仙寺本堂を仮住いとして開校しました。現在の区立桃園小学校です。

中野村・雑色村・本郷村の財政で桃園学校の占める割合は当初から大きなものでした。明治18年、上記3村の連合村費は、収入537円余のうち234円余が「教育費雑入」で、その200円が桃園学校生徒授業料でした。また支出は537円余のうち、なんと535円余が教育費として計上されています。内訳は全額が桃園学校費。このなか校長・教員の給料が450円で、校長の月給は12円でした。10年後には教員6人、生徒182人になりましたが、この間に桃園学校の分校や他にも私立学校が開設していますので、学校に通う児童が全体としてかなり増加したとみなせましょう。



▲明治18年 連合村費支出予算議案より

もう一つは当資料館の開館十周年です。郷土史料室を前身とし、1989年10月3日に産声をあげました。おかげさまでそれから10年になります。開設に関わる書類や展示・企画関係資料などいずれは古記録として研究の対象となるかもしれません。何を「古文書」とするか、それは研究する人が判断することです。これが「時間がたてばみんな古文書」ともいわれるゆえんでしょうか。

かえりみて、皆様はこの10年間にどのようなことがありましたか？

明治18年は1885年。ドイツ人ベンツがガソリン自動車を発明。伊藤博文の下で内閣制度が始った一方、不況の頂点で農村の被害は甚大だった。

中野往來

おおぜきますなり
大関増業の墓 上高田4-14-1
萬昌院功運寺墓域内

増業は、天明二年(1782)、伊予大洲藩主加藤加賀守泰衛の六男として生まれました。文化八年(1811)に下野国黒羽藩主大関増陽の養子となり、同年十一月に家督を継ぎました。十二月には従五位下に叙し、土佐守に任ぜられました。

藩政を厳しく行い、藩学を興し、練武場を設置して、武道を奨励しました。また窯業を起こしたり、製絨業を始めるなど、殖産興業に力を注ぎました。文政七年(1824)七月に隠居してからは、江戸箕輪の別邸で、国学、神道等の研究に励み、『烏伝神道大意』、『止枢要』、『創垂可継』等、たくさんの書物を著しました。また『校訂日本紀』を刊行し、文政五年には、これを仁孝天皇に献上しています。

弘化二年(1845)三月、六十四歳で没し、当時、江戸三田聖坂にあった功運寺に葬られました。

水戸藩主徳川斉昭は、増業を松代藩主真田幸貫、

平戸藩主松浦熙と併せて、天下の三畏友と称したと伝えられています。

墓石の大きさは、台石込みの高さが170cm、棹石の幅が47cm、厚さが44cmです。碑面には「従五位下行土佐守丹治真人増業墓」、右側に「弘化二年乙巳三月十九日」「括囊院殿通理美中大居士」と二行彫られています。墓碑前には、弘化二年三月十九日に、後藤充之丞基充、建部伝内昌滋、杉浦銃之進正宣が建立した石燈籠と女中が寄進した花立石があります。また、黒羽藩の勤皇思想は増業に源を発するとして、大正十三年に正四位を贈られたことを記念した「贈正四位大正十三年二月十一日」と刻した碑が建っています。



事業報告

各種事業経過

事業名	内 容	期 間
企画展	「写真でみる 中野区内 仏像・神社石造物展」	12/10～1/15
企画展	第9回 「おひなさま展」	2/11～3/14
体験講座	「拓本講座」 講師 資料館学芸員・専門研究員	3/21～3/22
文化財調査	新井・上高田地区民俗調査	継続中
埋蔵文化財 調 査	御嶽遺跡第二次調査報告書刊行作業	～1/31
	田国立療養所中野病院跡地遺跡発掘調査	継続中
	江古田遺跡(ベタニアホーム地区)発掘調査	10/21～11/9・12/17～1/24
	江古田遺跡(ベタニアホーム地区)発掘調査報告書刊行作業	1/24～継続中
	本田山遺跡発掘調査	12/3～12/16
	本田山遺跡発掘調査報告書刊行作業	1/24～継続中
	沼袋一丁目民有地立会調査	12/15
	江古田一丁目民有地立会調査	12/19
	本町二丁目民有地立会調査	12/19
	本町五丁目民有地立会調査	1/10
	鷺宮四丁目民有地立会調査	1/27
	中野三丁目民有地確認調査	2/10
	江原町一丁目民有地確認調査	2/21
江原町二丁目民有地立会調査	2/25	

寄贈資料一覧

敬称略・受入順

資料名	点数	氏 名
熊 手	2	佐久間 寛
陶質土器壺	1	堀江 浩介
浮世絵・書籍	174	池田 久男
御殿雛・御所人形	一式	福澤 美和
千代紙他		
雛人形・五月人形他	一式	赤帽薬師運送
押 雛	2	井上 黎一

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

入館状況

1997年12月～1998年12月 (延68日間) (人)

一 般	社教団体	学校教育	合 計
6,228	129	1,034	7,391



▲第9回「おひなさま展」開催風景

発行年月日 1998年4月1日

編集・発行  山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号9中教社第14号)